

月夜に誘いせう恋の罫

第一章 New Moon —— 新月 ——

神様は何故、人間を有性生殖せいじょうでしか子孫を残せない生物にしたのだろう——
すやすや眠る友人の赤子を見ながら、ふと思う。

当然だが、他者の優秀な遺伝子を取り入れなければ、人は進化できなかった。しかし、どうにかして、雄おすを必要とせずに単体で繁殖はんじやくできないものか……なんて、わりと真面目まじめに考えていたからか。

気づけば幸せそうにコーヒーを飲む幼馴染おとななじみに、こんなことを呟つぶやいていた。

「男とセックスしないで子供を作る方法って、ないかしら？」

「ごほっ！」

……彼女は盛大に、咳き込んだ。

世の中には二通りの女が存在する。男がいないと生きていけない女と、男がいなくても生きていける女。

私、鷹司櫻子たかつかさきりこは、自他ともに認める後者だ。

恋に憧れていない、どころか、興味すらない。生まれてからずっと、まったくもって男を必要としない人生を送っている。恋愛はおろか、結婚願望のかけらもない。

一般的に恋に憧れると言われる思春期の頃から、私は一生独身でいると宣言していた。男嫌いというほどではないし、男性を目の敵にしているわけでもない。けれど、男性不信になるトラウマは数多く経験している。

何故か昔から、私に近づく男はロクデナシばかりだったのだ。

私を知る長年の友人は、私のことをこう呼ぶ。『変態ヤンデレホイホイ』と——
「——男運が悪いからって、一体今度はなにを企んでるの？」

水を飲んでようやく落ち着いていた友人、花森秋穂——旧姓、鵲秋穂は、呆れた眼差しを私に向けた。二十七で電撃結婚を果たした彼女は、それまでは私同様、結婚しない主義だった。

彼女の祖父が元内閣総理大臣で、実家は政治家一家。

政界でもトップクラスのお嬢様として育てられたはずだが、秋穂曰く「自分は政治家の嫁に向いていないし、なる気もない」んだとか。

そんな彼女の夫は、国立大学の研究室に勤務している。一生独身貴族を謳歌すると豪語していたくせに、彼と出会うなり、秋穂はあっさり独身貴族同盟から足を洗ってしまった。裏切り者め。

今では立派に一児の母。夫の存在は羨ましくもないが、子供は心底羨ましい。

「言葉通り、男なしで子供だけ作る方法はないかしらと思って。聖母マリアの処女受胎みたいに。最近小さな子を見かけるせいか、母性本能に目覚めたみたい。私も子供がほしい」

「いや、それは無理だから。っていうか、櫻子なら相手は選び放題でしょう。見合いたっていくらでも可能なんだから、選り抜きの人格者を探し出してもらえばいいじゃない」

「結構よ。男はいらないの。見合いただと、相手の真の性癖は結婚してみるまでわからないし。それにどうせ私をほしがる男なんて、ド変態の犯罪者予備軍ばかりだもの」

過去を思い出して、思わず遠くを見つめる。

タワーマンションから見える外の風景は、空が広くて気持ちいい。

秋穂は小さなため息を落とした。

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花……とまで言われた天下の鷹司財閥のお嬢様が、一生独身宣言っただけでも男どもの悲壮感を煽るのに。男の子種だけほしいなんて、とんだスキャンダルだわ……。高嶺の花と言われ続けたあなたを狙っている男は、まだ大勢いるみたいだけど」

「全員却下。下心しかない野心家はトラブルの種よ。余計いらさないわ」

かといって、下手に権力のある男も扱いにくく、性質が悪い。

そう言いきれるほど、私はこれまで様々な経験をしてきた。

一体私のなにがそうさせるのかわからないが、何故か昔から、特殊な性癖を持った男に迷惑な好意を向けられることが多かった。

幼い頃は、それでもまだ可愛いものだった——と言えなくもないかもしれない。小さな男の子がするスカート捲りなんて子供の悪戯にすぎないし。が、それを大人が指示し、幼い少女が怒る顔に興奮を覚えて盗撮するとなれば、話は別だ。

子供心に気持ち悪いと思っただが、あの頃はそれ以上その教員に近寄らないように気をつけることしかできずにいた。恥ずかしさから、余計なことでは言えなかったものもある。

しかし、歳を重ねるにつれて、私の周囲に起こるあれこれは、とてもじゃないけど看過できないレベルになっていく。

知らない男が私の彼氏取りをしていたこともあれば、少しいいなど思った男性が実は私に対するストーカーの犯人だったこともあった。挙句の果ては拉致られそうになったことも。幸い、ボディガードに撃退されて、未遂ですんだが。

見目がよく、社会的地位もあり権力もある男ほど厄介だと、私は十代にして学んだ。

「ナルシストで自分に自信のある自尊心の高い男は、人の話を聞かないことが多いから嫌。あと、自分の都合のいいようにすべての物事を解釈する傾向が強いわ」

「言われてみればそうかも？」

相槌を打つ友人に、私は力強く頷き返した。

婚約の打診を断ったにもかかわらず、私に言い寄る懲りない男。その男に薔薇の花束を渡された十六歳の誕生日は、強烈だった。

突然跪いた男は私の脚に頬を摺り寄せ、『毎朝君に蹴られて起こされたい。結婚してほしい』とのたまったのだ。

三十路をすぎた男の発言にドン引くとともに、生理的な嫌悪感がわきあがったのは言うまでもない。

具体例をあげればきりがなが、一言でまとめれば「変態ヤンデレホイホイ」なんだとか。

ヤンデレなんて二次元でしか生息しちゃいけない生き物である。

三次元にいたら、いくらセレブだろうがイケメンだろうが、絶対恋愛対象になんてならない。

顔がよければ許されるというのも、私の辞書には存在しない。

顔がいいだけの男というのも要注意人物だから。

「櫻子がスイスの姉妹校に留学しても、めげずに追いかけていった男もいたわね。顔はすつごくよかつたよね、彼。でも、一途すぎてね」

「ええ、あれも気持ち悪かったわ……。わざわざ女子校を選んだというのに、近隣の男子校に転入しようとしたんでしょ。大病院のお坊ちゃんは」

奥手で純情すぎる男というのも、行きすぎると怖い。

初恋すら体験できなかった少女時代だけど、それでも一時の気の迷いで、淡い恋を夢見ていた時期もあった。

いつか王子様が……とまでは思わなかったが、穏やかで温かい愛情を無意識に求めていた頃があったのだ。

今はそんな感情も皆無だけど。

飲み干したコーヒークップをソーサーに戻したところで、すやすやと寝ていた秋穂の息子がぐずり出した。一歳になったばかりの夏芽君は、べらぼうに可愛い。

色素の薄いくくりな髪は、クォーターである母親譲りだろう。

抱き上げてあやし、ミルクを飲ませる友人を見つめる。彼女の横顔は、すっかり母親のそれだった。「……幸せそうね」

ぼつりと呟いた声を拾った秋穂が、即答する。

「めっちゃ幸せよ。素敵な旦那と息子に出会えて。櫻子の事情は把握しているけど、結婚だつてそう悪いものじゃないわ。独身同盟の一員だった私がそう言うんだから信じなさい。ひとり気楽で自由だし、楽しい。けれど、いつか寂しくなる日が来るわよ」

つい数年前まで、結婚するメリットなんて見当たらないと一緒と言っていたくせに、人は本当に変わるらしい。友人たちにしてみれば、変わらない人間の代表が私なのだろう。

「……寂しい、つて感情がまったくわからないんだけど。でも、今後寂しくなるかもしれないから、母性本能が強く刺激されて秋穂を羨ましいと思うのかも。やっぱり私も母親になりたいわ。男はいらないけど」

「結局そこに辿りつくのか……」

嘆息した彼女には悪いが、私の人生において恋とか愛とかを必要ないと思う気持ちは、きっとこれからも変わらない。

結婚なんて、紙切れ一枚の誓約じゃない。

今の自由をなくすのも、束縛されるのもごめんね。

結婚に失敗して離婚調停になったら、さらに悲惨だろう。

海外で暮らしていくつもりだった私は、法律を学んでいた時に住んでいたニューヨーク州の法律には強くても、日本のそれは守備範囲外だ。弁護士をたてて——というのは手間だし、そこにかかる時間も労力ももつたいない。

幸せそうな友人と夏芽君を見るのは好きだけど、自分におきかえると、リスクかなさそうな結婚生活を人生の選択肢に入れるなんて、想像できない。

おとぎ話みたいに、王子様とお姫様は結婚してめでたしめでたし——では終わらないのだ。むしろ現実には、その後の厳しい試練の始まりでしょう。

「行きつく先は、精子バンクかしらね」

半ば大真面目に考えている私に、秋穂は引きつった顔をした。

鷹司櫻子、二十九歳と六ヶ月。

三十路の大台に乗るまであと半年。年々お金では手に入らないものがほしくなるお年頃。彼氏も旦那もいらぬ、恋とか愛とかにも興味がない。

だけど私もどうやら、人並みに母親になつてみたいらしい。



鷹司家は遡れば旧華族の血を引く、皇族とも縁のある由緒正しい一族だ。

戦前から続く鷹司財閥は没落することなく現在まで繁栄し、それどころかさらなる成長を遂げている。

世が世なら、直系の血筋の私はやんごとなき身分のお姫様、らしい。

しかし私は、残念ながら蝶よ花よと育てられた麗しの令嬢とは、少し異なった。

楚々とした立ち居振る舞いが美しい大和撫子……と、外見だけしか知らない相手からは思われているが、実際は周囲曰く、女傑だ。

実の両親は、私が幼い頃に事故で亡くなっている。

ひとりぼっちの私を、唯一自分の血を受け継ぐ直系として祖父は存分に甘やかし……てはくれなかった。

逆に容赦なく躰けられたというほうが正しい。

茶道、華道に日本舞踊やクラシックバレエ、ヴァイオリンなどなど。数えきれない習い事を一通り習得させられ、隙のない才女に育てられた。

「好きに生きるためには、他者が口を挟む隙を与えるべからず」

祖父の口癖のひとつだ。
何事も一目置かれ、完璧に近い能力を手に入れば、周囲も口を挟めない。そうすれば、煩わしさが減る。

確かに一理あったので、私は貪欲に知識と技術を吸収し、特技を増やして己を磨き続けた。

負けず嫌いで気の強さも持ち合わせていたため、結果、深窓のお嬢様ではなく、女傑と呼ばれて

に相應しい女に成長したらしい。

ドン引きな求婚事件の後、私はスイスからアメリカに留学し、飛び級を繰り返して二十歳で四年制の大学を卒業した。

経営学を専攻後、MBA——経営学修士——を取らずに、法科大学院への進学を希望。

法律を学んでおけば、いざというとき自分の身を守りやすいと考えたからだ。

大学在学中にLSAT——法科大学院適性試験——を受け、二十三で無事に大学院を卒業。

そしてニューヨーク州での司法試験を受けて、合格通知が届いたところで——祖父から帰国命令が発令された。

正直、嫌がらせかと思っただわ。

「世代交代じゃ」なんて言っって、祖父はあっさりグループ会社のひとつを私に押しつけた。

祖父の“自由に生きたい”願望につき合わされたために、私は二十四の若さで鷹司財閥の中樞を担う総合商社、鷹司商事株式会社の代表取締役就任させられた。そして、多くの難題をそのまま引き継がされたのだ。

まったく、「今後のグローバル化への対応は、若い者に任せる」じゃないわよ！

それまで跡を継ぐ必要はないとか言っていたのに、横暴すぎる。

——かくして私は、戦いの渦中にぽいっと投げ込まれた。

本当、周りはどういつもこいつも油断ならない奴らばかり。

世界中と取引のある商社だというのに、日本の本社はそれはもうよくも悪くも、日本の企業

で。海外生活の長い私には、カルチャーショックが大きかった。

敵は身内にあり。

ひとつの判断ミスに足元をすくわれ、結果株主総会で干されるのも現実に充分ありえる。職場環境の改善、コンプライアンスの見直しと強化、社員の意識改革に今後の事業展開——

考えることは山ほどあって、どれも時間がかかる。

けれど目に見えた成果をあげなければ、私には能なしの烙印が押され、すぐに新たな社長が誕生するだろう。

絶対に、「女だから」や、「所詮お嬢様のおままごと」だなんて言わせてやるもんですか。

日々が戦争の中、恋愛にかまける暇なんてあるはずもなく、私のがむしやらに働いた。

ちなみに祖父は鷹司財閥の会長に就任と同時に、のんびりスイスで療養すると言ったが、彼に持病などは存在しない。時折送られてくる写真は、明らかに世界各国で撮られたもの。

あのクソジジイ、面倒事を可愛い孫娘に全部押しつけて、自分は世界一周旅行を満喫しているのよ。許せん。

でも自分勝手にめちゃくちゃな祖父だけど、彼は孫娘にちゃんとサポート役を置いていつてくれた。それが社長の第一秘書の、早乙女旭。もともとは、彼は祖父の秘書だった。

年齢不詳、経歴不明で、性別は男。

この男は文句なしに有能で、そして謎だらけである——

「社長、先ほどの会議の資料が届きました」

「ありがとう。デスクに置いておいて」

広々とした執務机の上に、会議でまとめられた資料がのせられる。

届けた張本人は部屋を退室することなく、資料で乱雑になっている机回りの片づけを始めた。

他の人間に触られたら苛立つが、この男だけはいつものことなので、好きにさせておく。

正直、助かると言えば助かる。

パソコン用の眼鏡を外し、液晶画面から視線を逸らした。

ふう、とひと息吐けば、先ほどまでいたはずの男がもういない。

ああ、ずっと同じ姿勢で首が凝ったわ。肩も辛い。軽くストレッチをし、綺麗に整頓されている

資料のひとつへ手を伸ばす。

「新製品のイメージ戦略について、だったわね。あとは新ブランドの立ち上げか」

パリりと資料を捲く。

うちは総合商社だから、扱うものは化粧品・美容系からエネルギーや繊維と、多岐にわたる。

子会社も多く、研究所と製造工場を含めれば、関連施設は両手では数え切れない。

先ほど届いたのは、化粧品部門からの資料だ。

新たなブランドの設立に、イメージモデルの選抜。

「人気アイドルグループの年間契約料って一億超えるのよね……凄いわ」

候補者リストを眺めていたところで、気配もなく秘書が戻ってきた。

トレイに私用のカップをのせて。中身はきつと、カフェラテだ。

「そろそろお疲れかと思ひまして」

「相変わらず気が利くわね。ありがとう」

カフェで出されるのと遜色がないカフェラテには、しつかりとラテアートまで施されていた。歩いて持ってきたというのに、描かれた花模様が崩れていないって、どうということなの。

ラテアートさえ器用にやっつてのける男を、ちらりと見上げる。

推定年齢三十五歳。左手の薬指に指輪がないことから、多分独身。身長は目測で百八十五センチ、体重は不明。

ガタイがいいのでそれなりに重そうだけど、動きは俊敏で隙がない。

恐らく脱いだら筋肉質なのだろうとは思う。見たことないけど。

凛々しい眉に鋭さを帯びた目、筋の通った鼻梁。男らしい精悍な顔立ちに甘さはなく、そんな野性的な魅力がありつつも、粗野ではない。

口調は丁寧、物腰も紳士的。

無駄口は叩かず、基本実直で真面目。若干融通が利かないところが玉に瑕。

趣味は不明だが、特技をあげたらきりがない。

語学は英語のみならず、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語が堪能。手話も点字も、ついでにモールス信号にも精通している。反射神経もよくてスポーツ万能、という噂。見たことはないけれど。

今までなにかを尋ねて、彼から「わからない」と言われたことがない。

そんなハイスペックな男とは、早五年の付き合いだ。

それなりの年月を過ごしてきたわけだけど、私が彼について知っているのはここまで。

仕事以外のプライベートは謎に包まれているし、実はかつて興味本位から素性を調べてみたけれど、失敗に終わったのだった。

私でさえ経歴を探れないって、一体何者なの。

祖父がどこからかスカウトしてきたらしいけど――

じつと早乙女を見つめていたら、奴は若干訝しむ顔をした。

「お気に召しませんでしたか」

「いいえ？ おいしいわよ。相変わらず引き出しの多い男ね」

「おほめにあずかり光栄です」

まったくもって、なにを考えているかわからない。

ひと口、カフェラテを啜る。

本当、温度も味も、私の好みドンピシャ。

私はこの男のことを掴みきれていないというのに、逆は違う。ダダ漏れだ。

仕事の補佐はもちろん、食事の注文や体調管理まで、なにからなまでに早乙女が任されている。

もはや私の執事かと問いたいくらいに。

でも、彼がいてくれたおかげで、いきなり社長に就任させられても戸惑うことが少なかったのは

事実だ。

その点感謝はしていても、心のどこかで芽生えたライバル心は消えない。

元来私は負けず嫌いで、そしてプライドも自尊心も高い。

自分よりすべての能力が上だと認めざるを得ない相手が傍にいるのは、やはり悔しいのだ。

「ねえ、つかぬことを訊くけれど。あなた結婚する気はないの？」

ここまでハイスペックで見目もよいのに、この男は未だ独身。

プライベートをはつきり訊くのは実ははじめてかもしれないが、口から飛び出た疑問はそのまま早乙女にぶつけられた。

予想外の質問に、彼は僅かながら目を瞠る。

「それは社長にお返しします」

「私は外野がうるさく画策しようと、結婚しないわよ」

「そうですか。でしたら私も独身を貫きます」

ん？

「あなた、上司が独身だからって自分も従う必要はないのよ？ いつの時代よ」

「私の意志ですからお構いなく」

呆れた眼差しで見つめるも、早乙女はさらりと私の視線から逃げた。人のことは言えないが、いつまでも独り身だとか家族が心配するんじゃないの？

「あなたを狙う女子社員の悲壮感たつぷりな悲鳴が聞こえそうね」

「それも社長にお返ししますよ」

「結構よ」

こんな軽口を叩くのも、はじめてじゃないかしら。

そう思えるほど、私は仕事以外のコミュニケーションをこの男ととった記憶がなかった。



今まで私は、鷹司の跡継ぎには遠縁の子供を養子に迎えようと考えていた。

とはいえ、親戚とは疎遠で、また鷹司の血を引く人間は極端に少ない。

具体的な養子のおてがあるわけではないこの状況下に加えて、このところの友人・知人の出産ラッシュ。それを聞き、私は近ごろ考えを改めた。

できることなら、私も自分の子供を抱いてみたい、と。

子供は授かりものだというのはわかっている。ほしいからできるわけではないし、ましてや跡継ぎがほしいから子供をつくるわけでもない。

ただ、自分の血をかけた子供に、無償の愛を注ぐ母親の姿、という憧れが私の中でどんどん大きくなってとまらないのだ。

というわけで、人間の雌が単体で繁殖できないのなら、どこかで種を調達せねばならない。

秋穂には呆れられたが、私は本気よ。夏芽君みたいな、プリティーな天使がほしいの。

「精子バンク……。これは最終手段かしら」

調べてみれば、独身女性も実は利用しているらしい。

昨今は私みたいな考えの女性も少なからずいるようで安心する。

「でもできれば子供の父親は、ちゃんと人となりを知っている相手がいいわね……。犯罪歴がなく、性格に問題がない人格者で、家系的にも大病のない健康体の男性。あと優秀な頭脳を持つ男がいいわ」

条件をあげましたらきりがないが。

外見も好みみならなお嬉しいけど、生理的に受け付けない人じゃなければ、あまり拘らない。

だって自分の子供だもの、どんな子でも愛せるに決まっている。

でも、本音を言えば、外見も好みならもつと深く愛情を注げそう。

実は面食いで、選り好み^{えらび}が激しいのだ。

私に直接近づいてくる男は要注意人物ばかりだったけど、知り合いからの紹介ならまだ安全かもしれない。

『後腐れなく付き合ってくれて、なおかつ精子を提供してくれる人格者で見目のいい男性を求む。

ただし、結婚願望のない男に限る』

かつての同志であり、独身貴族同盟のメンバーだった数名にメールを送信すれば、速攻で返事が返ってきた。

『そんな都合のいい男がいるか』

『鷹司家への婿入り^{むこいり}を望む野心家しか集まらないわよ』

『処女が男性襲うなんて無理だからやめておきなさいな』

……裏切り者どもがヒドイ。

自分たちだって、男なんていらな^いと言っていたくせに。

『皆今じゃ持ちぢゃないの。ずるいわよ』

人格者なら子供ができた^らと知った時点で、認知する^らと言い出すだろうし、そもそも遊んで捨てるような真似^{まね}はしないとのこと。だから私の提示した条件に合う男性なんて存在しない、と。

また、やはり私のバックグラウンドが厄介だった。

正体を隠そうにも、社交界に私の顔は知れ渡っている。

一般人男性で十分なのだが、そうなると彼女たちもあまり付き合いがないのだろう。なにせ、私の友人は皆幼馴染^{おきななじみ}だ。上流階級の子女ばかりが通っていた学園の。

ただの中に、ただひとり、『会うだけ会ってみる？』と言ってくれた友人がいた。

即お願いメールを送れば、数名の男性を紹介できると言う。

「大学教授に弁護士と、俳優？」

最後は一体誰が来るの。テレビはあまり見ないから、正直話が続くかどうか微妙だわ。

あまり過大に期待するべきじゃないとはわかっているけれど、存在しないはずの乙女^{おんな}心が少しだけ疼いた。

もしかしたら、私好みのステキな遺伝子を持つ男性に、出会えるかもしれない。

「そうよ、別に会っていきなり襲うなんて真似はしないわよ。ただ食事を楽しむだけだし」
ご飯を食べながらその人と合うか合わないか、確かめるだけ。

そんなまともなデートなんて、はじめてとも言える。ちよつと照れくさい。

「いえ、これは取引先の食事会と同じだと思えば、緊張も和らぐわ」

それに自分の専門外の相手の話を聞くのは、嫌いじゃない。知識と視野が広がるのはいいことだ。

仕事早い友人がオススメしてきた男性と、お会いする日がやってきた。

その日は定時である五時より一時間遅い六時に、迎えの車を呼んでいる。

我が社ではたとえ役員であっても、不必要な残業はするなど伝えてある。

もちろん、どうしても例外が出る場合は仕方ないが。

だから仕事をしていたって生産性が上がらない。遅くまで仕事をするのが美德だと思っているのは、世界では少数派よ。

季節は九月上旬。

暑かったり寒かったりと、気温が定まらないけれど、コートにはまだまだ早い。

六時十分前、社長室に隣接している仮眠室にて、Vネックの黒いワンピースに着替えた。薄手のカーディガンを羽織り、靴はそのままハイヒール。

上品な大人の女を演出した格好で部屋に戻れば、まだ退社していなかった早乙女が僅かに怪訝そうな表情を覗かせた。

「本日は取引先との会食などはなかったはずですが？」

「ワンピースに着替えたくらいで大げさね。どうして仕事としか思えないの」

「では、どなたとお会いされるのでしょうか」

普段は仕事以外の領域まで入り込んだりしないのに、珍しいこともあるものだから。

訝しむ表情の男は、どことなく不機嫌なオーラを漂わせている。

「とある大学教授と食事に行くのよ」

「プライベートですか」

「ええ、もちろん。一応デートだし」

「……………」

私のことなんて興味がないと思っていたけど、何故この男が不愉快な顔をするのかしら——って、理由は簡単か。恐らく祖父からいろいろと聞かされているのだろう。私のトラブル体質について。

「心配しなくても身元ははっきりしているし、ちゃんと護衛もつくわよ？ 他の客の迷惑になるから店内には入ってこないけど」

眉間に皺を刻む早乙女の洪面は緩まない。なにが気に食わないのかしら。

ああ、もしかして。

ぼん、と手を叩いた。

「二日酔いになるんじゃないかと思っているのね。安心して、平日は飲まないから、明日の業務に支障はないわ。あなたも早く帰ってゆっくりしなさい。じゃ」

バッグを手に持ち、社長室を後にした。

なにかを言いたげな早乙女は、結局私に声をかけないままだった。

「一応五年も傍にいたわけだし、保護者感覚？ それともおじいさまに余計なこと吹き込まれてるとか」

ありえそうね。

過保護になられたら厄介だし、祖父には釘をさしておくか。

あの男もいい歳だ。私に遠慮せずに、さつさと可愛いお嫁さんを探せばいいのに。

——このときは、そう呑気なことを思っていた。



大学教授にはじまり、弁護士、そして舞台俳優と続いた食事は、すべてつつがなく終わった。結論を言えば、……ごめんなさい。私にはちよつと、合いそうになかった。

というか、本音を言えば、魅力を感じなかったのだ、彼らの遺伝子に。

当然、そんな失礼なことは告げていないけど。

別に見合いとか、そんな堅苦しいものではなく、友人夫妻を交えた食事会として、私は彼らに会った。

会話の内容はほとんどが仕事。お互い取引相手と話す感覚だ。

ただ仕事の延長線で話をしていただけなので、色つぼさは皆無だった。

仕事の話は興味深く、勉強にはなったのだけ……

彼らに子供の遺伝子上の父親になつてもらいたいとまでは、残念ながら思えなかった。

一世一代の取引を交わしたいと強く思わせるには、どうやらなにかが足りないらしい。

別に彼らが悪いというわけではない。

仕事への熱意はあるし、性格だつて真面目で誠実さも窺えた。

私に下心を持って近づいてきた変態とは違う。人間性にも優れた人。

彼らを魅力的に感じる女性は、大勢いるだろう。

ならばどこが合わないのかと言われると、一言では表せない。

仕事にプライドがあるのはいいことだけど、自然に自慢を繰り返すのを聞いているのは、はっきり

り言って少々げんなりしてしまう。食べ物をおいしく食べられる相性であるのかもしれない。

人の話を捻じ曲げて解釈する皮肉屋な大学教授、民事訴訟で勝訴した話を延々と繰り返す弁護士、

落ち着きがなく好きな食べ物だけを少しずつまわお喋りな俳優。

食べ物の食べ方って重要だと実感したわ。

女の子は結構見ているわよ。男性の本性が現れる瞬間でもあるから。

悪い人たちではない。

ただ一言で言えば、……とても疲れた。

「なんで私がつつと気を遣わないといけないの。接待じゃないのに」

私に必要以上に気を遣わせる男はダメだわ。疲れる。まあ、一番気を遣っていたのは、友人夫妻だろうが。

友人には申し訳ないと謝罪して、この件は終了した。お礼とお詫びに、二人にはとっておきのワインを贈る予定だ。

親しき中にも礼儀あり。はじめはきっちりつけないと。

モヤモヤとしたなにかを抱えたまま会社へ行き、仕事をこなして帰宅する日常が再び繰り返される。

仕事に没頭していれば、プライベートの不満なんて思い出さないんだけど、仕事のストレスが蓄積されれば話は別だ。

ああ、癒やしがほしい……

目を通さないといけない書類の山にげんなりつつ、つい先日秋穂が送ってくれた夏芽君の写真をスマホで確認した。

完璧なカメラ目線で極上の笑顔を見せる夏芽君は、仕事に疲れたときの最高の癒やしだ。

まさに天使！

『うちの子可愛いでしょ』

なんて親バカ丸出しのメールにも、迷わず即答。

ええ、可愛いわよ。すつごく！

子供の純粋な笑顔って、どうしてこう幸せな気持ちにさせられるの。

私が汚れた大人になったからかしら。

この仕事に就いてから、剣山けんざんの上を綱渡りしているような錯覚が拭えない。

隙を見せたら落とされる可能性は、己おのれを奮い立たせると同時に多大なるストレスをもたらす。

祖父は私の実力を試すよりも潰そうとされていたと言われたほうが、納得がいく。

はじめてこの会社に「社長」としてきたとき、長年会社を支え続けてきた人物である副社長の驚尾おは言った。

『ほお、ずい分と可愛らしいお嬢様だ。会長も人が悪い。若いお嬢様には荷が重すぎるだろうに。あちらが社長室ですが、あなたはただデスクに座ってらっしゃるだけでよろしいですよ』

紳士面ですつこり笑った壮年の男。

顔に刻まれた目尻めじりの皺しわが深まるほどに、威厳いげんと貫禄かんろくが際立つ彼は、見るからに一筋縄ではいかない。

副社長をはじめとする役員の数名は、私を認めていないから、「社長」とは呼ばなかった。

別にそう呼ばれないことなんてどうでもいい。

けれど、だからと言って社内で「お嬢様」はないでしょう。

……意地でも認めさせてやるわ、私が見える人間だということを。

と、闘志を燃やしていたあの頃は、今より血の気が多かったのだろう。

一ヶ月かけてこの会社の状況を把握できたとき、頭に浮かんだ一言は、「やってくれたなクソジジイ」、である。

祖父はあえて、内部の厄介事を中途半端なまま私に引き継がせた。理由は簡単。甘えるなどということ、私が見える人間かを見極めるため――

それからの私は、まずは社内の制度の見直しに取り組んだ。そのうちのひとつが、男女ともに容易に取得可能な育児休暇制度に、社内保育園の整備といった、子育て環境の充実。

子供を気にせず安心して仕事に励めることは、従業員の満足度を上げる。女性雇用のアピールポイントにもなり、安定した雇用に繋がった。また企業のイメージアップもできて、作って損はない。そしてできた一階のロビーからそう遠くない場所にある保育園は、密かに私の憩いの場となっていた。

「ちょっと休憩するわ。十五分したら戻るから探さないで」

有能秘書から了承の返事を聞く前にさっさと退室し、役員専用のエレベーターに乗り込んだ。

目的地は一階。警備員室に顔を出し、ちゃっかり隅っこに置かせてもらっている私物の荷物を取り出す。そして、彼らに愛想のいい笑みを向けた。

「いつもご苦労様。あと場所を借りて悪いわね」

「い、いいえ！ とんでもないことです。光栄でございますっ！」

警備服を着た年若い青年が真っ赤になつてどもるのは、初心すぎて可愛らしい。

人気のない通路を足早に歩き、一階の奥に作られた保育室へ到着した。

ぐるぐるにねじつてクリップで留めていた黒髪をほどき、背に流す。スーツのジャケットを脱いで、手に持っていた薄いピンクのカーディガンを羽織った。

社内で使用している、度の入っていない眼鏡を外して、先ほど警備室に置いていた袋から「桜保育園」と書かれたピンク色のエプロンを取り出す。それを身に着ければ、どこから見てもなかなかって保育士だ。

「もうお昼寝前の時間か。子守唄代わりに一曲弾いてあげようかしら」

扉を開けて、防音対策が施された室内に入る。

もちろん、専用のカードキーを使用して。

「あ、さくらおねえちゃん！」

目ざとく気づいた園児たちが、わっと私に群がった。

きらきらしたお目目で、純粋な笑顔を見せてくれる。

もう、なんてかわゆい！

「さくらおねえちゃん、ひさしぶりね！」

「きょうはお歌うたうのー？」

好奇心旺盛な子供たちに、にっこり微笑む。

「皆元氣そうね。お歌はまた今度にしましょう。そろそろお昼寝の時間でしよう？」

ここでは0歳児から小学校入学前の子供まで預かっている。

乳児は隣室にいるようで、今足元にまわりついているのは二歳から六歳までの子供たちだ。視界の端でここにこ笑っているのが、この保育園の園長先生。

その隣りで二歳の子供を抱いているのが、まだ年若い保育士の女の子。緊張した面持ちでおろしていた。

毎回予告もなしに現れるの、心臓に悪いわよね。ごめんさい。

別の保育士がパンパンと手を叩き、園児たちをお昼寝室まで移動させる。

だけど眠くてぐずっている子や遊び足りない子など色々なようで、なかなか従ってくれない。

「さくらおねえちゃんとおはなししたい〜」

「ふふ、嬉しいけど眠そうよ？」

小さな手でエプロンの端を掴むのは、ご両親ともにうちで働いている、逢坂夢ちゃん。オシヤレが好きなおしゃまな子だ。ツインテールがよく似合っている。

「こもりうたに、なにかひいて？」

子供たちのおねだりに、保育士に目線で尋ねれば、頷かれてしまった。こんなこともあるのかと、ヴァイオリンケースを入り口に置いてきたのがバレていたらしい。

仕事や来客の邪魔はしないように、ここは録音スタジオ並みに防音が施されている。近くの警備室にも音は届かないということで、誰かに聴かれる心配はない。

わくわくしている子供たちをお布団の中に潜らせて、「一曲だけよ？」と念を押す。

音を調律して、一呼吸。子供たちが好きな歌を演奏した。

曲名は、『きらきら星』。

ゆったりと絃を引き、心を落ち着かせる。

ヴァイオリンは子供の頃、英才教育のひとつとして習わされたものだけど、趣味でも続けていてよかった。自分の特技がどこで役立つか、大人にならないとわからない。

引き出しは多くても、いざというときちゃんと引き出せなきゃ意味はないが。

演奏が始まってすぐはうつとりと聞いていた子供たちだったが、曲が終わる頃には本当に子守唄代わりになっていた。今はもう、全員寝ている。

起こさないようにそつと部屋を出て、園長先生と保育士たちに挨拶をした。

気づけばさつき早乙女に伝えた休憩時間をすぎている。

「しまった、急いで戻らないと面倒くさいわ」

手早くエプロンを脱いで、ケースに仕舞ったヴァイオリンを持ち上げた。

「では、お邪魔しました……」

扉を開こうとしたら、最初からお昼寝を放棄しプレイルームで遊んでいた五歳児の男の子が、私の脚に勢いよく抱き着いてきた。

「さくらおねえちゃん！」

「きゃっ」

うわ、倒れる——！

だが、思っていた衝撃はやってこない。その代わりに、がっしりとした腕と手の温もりに支えられた。

つて、あれ？

「匠真君、いきなり危ないでしょう」

慌てて駆け寄ってきてくれた保育士さんに彼は窘められる。そして私はいつと、嗅ぎ覚えのある匂いに、振り向けない……

「予定よりすぎていますが。なにをなさっておいでですか？ 社長」

「……っ、探さないと言っただけけど？ 何故ここにいるのかしら、早乙女」

和やかな癒やしムードはどこへやら。一瞬で現実へ戻された。

振り向けば、私より二十センチ以上は身長が高く、威圧感のあるデカイ図体の男が私を抱きとめている。

「十五分と先に告げて出て行かれたのは、あなたのほうですよ。時間厳守でお願いします」

無表情がデフォルトの男は、腰に響くバリトンで返した。

精神な顔立ちは男らしく整っていて見目がいいが、四角四面で融通が利かないのはどうにかならないものか。もう少し柔軟に対応してくれてもいいんじゃないの？

私からすつと離れた早乙女は、いきなり現れた大きな男にびっくりしている匠真君と、目線を合わせるようにしゃがんだ。

子供の頭がすつぽり入る大きな手で、ガシツと撫でる。

「走ったまま勢いよく抱き着くのは危険です。相手は女性なのですから。いいですね？」

こくこくと首を縦にふる子供を見て、仏頂面（ぶつどうめん）のあの男が……笑った。

その瞬間、目を睜（みは）つたのは私だけではなかったはず。現に、若い保育士数名が一瞬でうっとりした顔つきになった。

「大丈夫よ、匠真君。私になにか言いたいことでもあったの？」

しゃがんだ私に、彼は落ち込んだ顔をして謝ったが、優しく問いかければ目を見つめてくれた。

「あのね、またヴァイオリンひいてくれる？」

「あら、気に入ってくれたのね。嬉しいわ。ええ、今度弾いてあげるわ。約束よ」

指切りをすれば、笑顔を見せてくれた。やっぱり子供は素直で可愛い。

「おじさん、さくらちゃんのカレシ？」

いきなり背後からかけられた声に、はっと振り返る。どうやら別室で起きていたのは、彼ひとりではなかったらしい。

女の子のひとり、姿を現したかと思えばいきなりそんな発言を投げつけた。

この男が彼氏だなんて、天地がひっくり返ってもありえない！

だけど、社長と秘書だなんてもちろん言えない。

「いいえ、仕事の仲間よ」

私がおここに、さくらおねえちゃんとして来ていることは、社員には秘密なのだ。園児たちに社長なんて言ったら、どこでバレるかかわからない。

「ふーん？」と呟いた結ちゃんは、興味深く早乙女を見つめていた。
ええ、本当に。

この男が私の彼氏だなんて、絶対にありえないわ。
でも……とここで、頭がフル回転を始めた。私が捜し求めている条件と照らし合わせると、早乙女は意外すぎるほどピッタリはまる。

悔しいことに私よりも多くの引き出しを持つ、経歴不詳の男。

頭の回転が速く、ひとつ頼めばその十歩先まで見据えた予定を立て、行動に起こす。なにも言わなくても、望んだところまで仕事が片づいているなんて、日常茶飯事だ。

顔立ちは端正で声もいい。男らしい逞しさは、ずばり好み。

そして意外にも、子供に見せた顔は優しくかった。鋭い眼差しをふつと緩め、口角を上げて笑った表情は、希少中の希少。

私の会話に難なくついていけて、テンポも文句なし。私が遠慮や気遣いする必要のないところも、ポイントが高い。

——彼氏と間違われてから、ここまでの結論を出すのに僅か十秒。

私は自分を迎えに来てくれた秘書の早乙女をじっと見上げた。

心の中で、ニンマリと笑う。

……へえ、いるじゃない。こんな近くに、理想通りの物件が。

「お騒がせして申し訳ありません。私たちはこれで失礼させていただきます」

一礼した早乙女が扉を開けて、私を先に退室させる。

手を振る匠真君と結ちゃんに手を振り返し、役員専用のエレベーターに乗った。

その間に、薄ピンクのカーディガンからスーツのジャケットに着替えておく。

ヴァイオリンケースは早乙女の手に渡っていた。

静かにエレベーターが目的地に到着するまで、終始無言。

だがそれでいい。

チン、と小さな到着音が響いたのは、私の脳内ですべての計算が終わったのと同時だった。

——ターゲット、ロックオン。

この男ほど相応しい人間はいない。そう、私の未来の子供の、父親に——

社長室に戻りいったん荷物を置いてから、社員食堂へ向かった。

もうとっくにお昼時間は過ぎてているが、実はまだご飯を食べていない。十二時すぎまで会議で拘束され、その後は未だ私を面白く思っていない役員連中からネチネチとした嫌味攻撃に遭っていたのだ。それでぐったりしていたから、私は保育園に癒やしを求めに行った。

子供たちから「さくらおねえちゃん」と慕われて、一瞬で心が癒やされたわ！

純粹な気持ち嬉しい。狐狸妖怪ばかりを相手にしていると特に。

ヴァイオリンも弾いたことでよりリラックスできた私は、空腹感を覚えたわけだけど……、何故か早乙女と一緒にいてくる。

監視役か。さつきみたいにふらふらどこかに行かれたら困るからか。

「あなたもお昼ご飯まだだったの？」

「ええ。本日のお昼は社長が社員食堂へ向かわれると思っておりましてので」
思考と行動を読まれていて怖い。

今日の昼食を社員食堂でとうとうと決めたのは、私自身でさえついさっきのことなのに。
有能すぎるのも厄介だわ。浅知恵では、この男を出し抜けない。

けれど、先ほどの考えが頭をよぎる。

私の秘書は、社内での人気が高い。女子社員からは日々、熱い視線を向けられている

私たちは二人セットで歩くことが多いけれど、隙あらば狙おうとする狩人も少なからずいる。

今まではまったく気にならなかったが、私もその狩人に仲間入りをしたかったので、今後は普段以上に早乙女と一緒にいなければ。

最近じゃ、雑談も珍しくないし。お昼時間は探りをいれるチャンスだ。

「本日のサバの味噌煮定食は終わってしまったようですね」

「この時間だし、仕方ないわよ。人気メニューなもの」

食堂前の入り口にかけられたメニューを見れば、人気メニューはことごとく売り切れだった。

食材にこだわり、栄養バランスも満点な社員食堂は、うちの会社のアピールポイントのひとつだ。

テレビや雑誌から取材されること、数回。

十五階にある食堂は明るく開放的で、そしてお値段は安い。

一食ワンコインで、メイン+ドリンクとサラダバーも食べ放題。

また、一ヶ月分のパスも購入可能だ。ひと月分なら五千円で食べられる。毎日行くなら十日もあれば元が取れるので、断然お得になっている。

これで人気が出なかつたら泣けるわね！

実は役員専用の食堂というのも別の階にあったのだけど、私が社長になってからすぐにそこは廃止した。

食堂が既にあるのに、わざわざ役員だけのためにもうひとつ作るなんて、ありえない。それこそ余計なコストだ。

忙しいならこの社員食堂へ電話一本すれば、食べに下りなくても部屋に運んでもらうことも可能だし、テイクアウトもできる。

けれど私は社員と混じって食事をすることを推奨している。

それでももしなければ、彼らの声をいつ聞くというの。社員を緊張させるといふ反対意見も出たけれど、それは慣れさせればいいだけだ。

現在、かつての役員食堂は、社員たちの憩いの場として提供している。

ソファを置いて、ちょっとしたラウンジに変貌させれば、ふらりふらりと休憩時間に飲み物を持った社員が寄り始めた。

社員証のカードがプリペイドカードとして機能しているので、食堂に入ったと同時にカードを提示した。

ピツ、という電子音が鳴り、中へ入る。

人はまばらだけど、この時間にしてはガラガラというわけではない。

中へ入った直後、一瞬室内が静まりかえった気がするが、それを気にするほど私の神経は細くない。

何気ない顔でトレイを取ろうとすれば、さっと動いた早乙女が私の分も手に抱えた。

「ちよっと、自分の分は自分で持つわよ」

「いいえ、私が持ちますので。ご注文をどうぞ」

人の視線がチクチクと痛い。

「あのね、あなたは私の使用人じゃないのよ。メイドや執事ならともかく、秘書でしょ。それとも私の保護者気取りなわけ？」

「……」

否定しないし！

「社長、後がつかえておりますので、ご注文を」

早乙女は、頑なに私にトレイを持たせなかった。きつと落とすと思っているのよ。

子供扱いに拍車をかけそうでなんとも癪だが、たまたま目についたオムライスを注文した。サラダバーにて和洋中のサラダを取り、ウーロン茶を持ってテーブルにつく。

威圧感のある男の傍には、誰も近寄ってこない。いえ、皆気にはなっているようで、離れた席から窺っているのがバレバレだけだ。

遠巻きにされるっていうのは、少々寂しいものだ。

「社長、卵以外のたんぱく質が見当たりませんよ」

「うっさいわね、チキンライスなんだから大丈夫よ。あなたは私のお母さんか！」

パチン、と割り箸を割った音が響く。レタスや大根などの盛り合わせサラダと、オムライスじゃ、そう思われても仕方ないが。でも夜に補うからいいのだ。

私の洋食系メニューのトレイに対して、早乙女はぶり大根に浅漬け、いんげんの白和えとお味噌

汁を頼んでいる。彼は和食を好むらしい。

野菜もたつぷり。でもドレッシングは使わない派。背筋を伸ばしてお味噌汁を啜る姿は、どこか気品が漂う。

「なにか？」

「いえ、別に。あまり気にしたことなかったけれど、あなたって綺麗に食事するのね」

お箸の使い方と食べ方の所作が丁寧だ。

栄養バランスを考えて食べるのは、正しい食事のあり方。

先日お会いした俳優——名前忘れた——は、あまりいい食べ方をしていなかったけれど。

サラダを食べ終わり、とろとろの玉子が絶品なオムライスのスプーンですくう。

その後無言で食べ進めて、食後のお茶を飲んだ後、二人で社長室へ戻った。

「社長、早乙女さん。お疲れ様です」

社長室の扉の前で待っていたのは、入社五年目の秘書課の若手、小早川だ。

「どうかしたの？」

扉を開ける早乙女に促されるまま中に入れば、彼はどこか歯切れの悪い声で「お届け物です」と、いくつか小包を差し出した。

大、中、小のそれらを見て、すっと目が据わる。

あれは十中八九、私宛ての貢ぎ物だろう。

「それは？」

「鷺沼製薬の鷺沼専務から、お届け物でございます」

メッセージカードがあるということで、小早川に許可を出して読み上げさせた。

「今週末の創業祭、忘れずに出席をお願いします、……とのことです」

「……参加予定ではあるけれど、エスコートはお断りしたはずだわ」

思わずげんりしたため息を吐き出す。

付き合いのある鷺沼製薬が百周年を迎えるので、今週の土曜日に盛大なパーティーが開かれるのだ。

祖父の前の代から懇意にしている製薬会社の記念式典に、私が出席しないわけにはいかない。

けれど、この三箱にも及ぶ贈り物には、正直嫌な予感しかしない。

あそこの専務は、社長の次男坊。私よりいくつか年上だが、未だ独身。

そしてことあるごとに、私にちよつかいをかけてくる。丁寧な断り文句もさらりと流すのは、鈍いのか、わざとなのか。バカではないから、恐らく後者だ。

「めんどくさい……」

小さなぼやきは再度吐いたため息に消された。

テキパキと準備を始める秘書に声をかける。

「早乙女、お願い」

「は」

室内にあるソファに座り、男二人が小包を弄るのをじっと見守る。
まずはエックス線を使い、箱を開けずに中身の確認をする。

空港のセキュリティチェックに使うアレに似ている。一応警備室で金属検査を通過しているの
危険物ではないはずだが、念には念を入れてということらしい。

ゴーグルと手袋を着用し、準備を万端に整えてから挑む秘書一人は、本当に一企業の秘書なの
か怪しい。

「こちらの箱には衣類ですね。隣の箱には靴が納まっています」

「一番小さな箱から金属を探知しました。警備室からの連絡通り、ジュエリーと思われま

す」

「そう。危険なものではなさそうね」

とは言ったものの、安心するのはまだ早い。

小早川に後処理を任せた早乙女は、物々しい装備を脱いだかと思うと、手袋をはめたままにか

を手に持つ。——盗聴器の探知機だ。

「——反応ありません」

「そう、ご苦勞様」

ようやくほっとひと息つけたところで、二人が箱を開ける。

海外の有名ブランドの包装紙は見かけだけではなかったようで、中身もちろんそのブランドの
衣装と靴にアクセサリーだったそうだ。

何故曖昧なかつて？ 自分で確認できなかつたからよ。

一番大きな箱を開けたとたん、小早川が恥ずかし気に顔を紅潮させて視線を彷徨させた。

「一体なにを送ってきたの？」

どうせろくでもないもの——あの男が考えそうな奇抜で露出の激しいドレスが入っているに違
いない。

開けた箱をパタンと閉じた早乙女は、私にこう告げた。

「送り返しましょう」

「え？」

「小早川君。手配を」

「はい！」

社長室から去る小早川に、動揺していた気配はもうない。

切り替えが早いのはいいことだ。彼はまだ若いから、早乙女みたいなポーカークーフェイスは難し
いだろうし。

部屋に二人きりになった途端、早乙女がコーヒーを淹れて持ってきた。

甘くないコーヒを一啜る。彼が淹れるコーヒは、香り豊かでおいしい。

「で？ 結局なんだったの？」

「カードの通り、社長宛ての衣装が一式そろっておりました」

「その割には慌ててたわよね。そんなに見せたくないほど、悪趣味だったの？」

返す前に見たかった！

それはそれで、鷺沼の次男を強請れるネタになったのに。使えるものはなんでも使うお腹の黒い櫻子さん、イイ子ちゃんな考えを持っていない。しかし、そんな私のお腹の中など気にせず、僅かに眉根を寄せた早乙女は、「悪趣味極まりないものでした」と答えた。

「男の願望を押しつけただけの見苦しい衣装でしたので、どうぞお忘れください」

「そこまで言われて忘れられるほうが凄いわよ」

男の願望ってなによ。メイド服とか？

リアルメイドは屋敷に帰ればいますけど。

結局なにが届いたのかはわからぬまま、その後の処理はすべて二人に任せて、私は自分の仕事へ取り掛かることにした。

早乙女の姿が室内から消えたのを確認して、スマホを取り出す。もちろんこれは、会社が契約している仕事用ではなく、プライベート用。

仕事用だと隅々まで見られる可能性があるからね。我が社のIT戦略部は優秀だ。

目当ての人物にかけると、さほど待たずに電話は繋がった。

「お疲れ様です。鷹司櫻子ですけど、ひとつお願いできるかしら？」

要件を述べて電話を切るまで、僅か三十秒ほど。

「さあて。今度はちゃんと隅々まで調べてもらいましょうか」

「秘書の早乙女旭の謎を徹底的に暴いてちょうだい。恋愛面を中心にね！」

と、簡単に要約すれば、こんな内容を依頼したのだ。私を買収した興信所兼警備会社の探偵たち。どこまで探ってこられるやら。

部下のプライバシーを暴くなんて真似、普通ならやらないけど。どうしてもな場合は存在するし、仕方がない。

「修羅場はごめんだからね。実は既婚者とか交際相手がいるとか、性癖に問題があるとかじゃなければ、諦めないわよ」

恨むなら、有能すぎて私に目をつけられた自分を恨みなさい。

これからのことを考えると、高揚感で気分がとても浮き足立った。

血湧き肉躍る、という表現がぴったりだわ。

「うふふ、覚悟してなさい、早乙女。のんびりできるのも今のうちよ」

仕留めるなら、一気に急所を狙うまで。

女豹を彷彿とさせる鋭く光った目を睨めて、ぺろりと舌でルーージュを舐めとった。



「お疲れ様でした、櫻子お嬢様」

終業後、迎えるの車に乗り込んだ私は、ふかふかなシートに身を沈ませる。

「いつもありがとう、喜多嶋さん。待たせたかしら？」

「いえ、時間通りでございます」

うちの運転手で使用人のひとりの喜多嶋さんは、柔らかい空気をまとう壮年の男性だ。

父親が生きていたら、恐らくこれくらいの年齢だろう。

子供の頃から私が留学するまで、ずっと送迎は喜多嶋さんの仕事だった。学園で嫌なことがあったときも、我儘を言つて寄り道がしたいとごねたときも、いつも私に付き合ってくれた優しいおじさま。

今でも、こうして迎えに来てくれるとほっとする。会社という戦場で戦ってきた後だとなおさら私にとって、子供の頃からの使用人の彼らは、家族同然。というよりも、血縁者が極端に少ないため、家族だと言いつける。

「なにかいいことでもございましたか？」

「え？ 何故？」

「お嬢様が楽しいような顔をされていますから。なにか嬉しいことでもあったのではないかと」

職場を去ると、途端に感情が顔に出やすくなるらしい。緊張が緩んでいる証拠だ。

「ええ、嬉しいことかはわからないけど、楽しそうなことがこれから起こるのよ」

「それはなにかと伺つてもよろしいでしょうか？」

「ふふ、まだダメよ。結果が出てから教えてあげるわ」

信号で停まった車を発車させて、喜多嶋さんが微笑む。

「それは楽しみにお待ちしております」

「期待してちょうだい」

鷹司家に仕えてくれる彼らに結果を報告するときは、私は独り身ではない。

お腹に素敵な宝物を授かった、という報告になるのだ。きっと彼らは驚愕するだろう。

一生独身宣言をして、子供も作らないと公言していたから、私は皆に心配をかけているのだ。

だから間違ひなく、彼らは喜んでくれる。たとえシングルマザーとして育てると言つても。

「週末の鷺沼家の創業祭は、早乙女にエスコートを頼もうかしら」

ひとり、呟く。今まではなんとも思っていなかった相手が、これから私の大事な人になるのだ。

子供の遺伝子上の父親、という。

三十分ほどで、車は自宅へ到着した。

閑静な高級住宅街の、さらに奥まった場所。そこにある屋敷は、とにかく大きくて古い。

大正時代に建てられた歴史的建造物で、レトロな外観が可愛いと言われている。

また、一応国の重要文化財にも指定されている。

ゲートを抜けてから玄関まで車で五分。どんだけ広大なんだと思わせる敷地に、はじめて来る人は言葉をなくす。

この屋敷は、ロンドン出身の有名な建築家に依頼をして造らせた。

レンガ造りで全体的にシックな雰囲気洋館には、和室もある。庭は西洋風のみならず日本庭園もあつて、和と洋が程よくまざっている。

ところどころ修繕もされているが、そろそろ百年が経とうとしているのに、未だに住めるのが凄
い。まあ、ガタがきている箇所もあるけれど。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ただいま帰りました」

出迎えてくれた数名の使用人と言葉を交わし、昔から私の面倒をみてくれている母親代わりの芙
由子さんに鞆を手渡した。

ちなみに芙由子さんは、喜多嶋さんの奥さんである。

「お嬢様、お館様からお電話が入っております」

喜多嶋家の長女に鞆を預けた芙由子さんが、電話の子機を私に渡した。

「おじいさまから……珍しいわね」

しかもなんてタイミング。心底嫌な予感しかなかった。

たったひとりの血縁者と言える相手なのに、日々無理難題をぶつけられて疲弊している私は、こ
の状況を作り上げた祖父に腹を立てていないとは言いつてもいいけれど、

が、私も大人。半年後には三十の大台に乗る。

老人の戯言にこれ以上付き合うつもりはないけれど、祖父孝行はきちんとするつもりだ。

「お電話代わりました、櫻子です」

『おお、櫻子か！ 元氣そうじゃの』

久しぶりの祖父のほうこそ、ストレスもなく快適そうな声だ。つてか、若い女性の英語が間近

で聞こえるんだけど？

どこのリゾート地で療養してるんだ、この人は。

「ええ、お陰様で」

嫌味には嫌味を返しても許されると思う。

そんな挨拶の応酬した後、彼はまた面倒事を私に投げた。

『本来なら僕か他の者が出席するはずだった集まりだが、櫻子、お前行っておいで』

「……はい？」

ちよつと待った。いきなり「行っておいで」とか言われても、急には無理よ。

第一私のスケジュールは、かなり先までぎっしり詰まっている。

にもかかわらず、人の話を聞かない祖父は、気にする様子もなく話し続けた。

『海外でのカンファレンスじゃぞ。世界を相手にする実業家に経営者、各分野で名を馳せる著名人
がわんさか集まるのじゃ。貴重な機会じゃろう。しかも今年の開催地は、ニューヨークじゃ』

「ニューヨーク？」

帰国してから一度もあの地には帰っていない。思わず懐かしさが溢れてしまったが、ちよつと
待った。なんで私が行かないといけないの。

『ええのお、ええのお』なんて言うなら自分で行きなさいよ！

ギリッと奥歯を噛みしめて、息を吐き出す。この人に今さらなにを言ったところで、状況が変わ
ることはない。これは、すべて決定事項だ。

鷹司家の当主は祖父である。私が持つ権限は、彼の半分もない。

「で？ いつからなんですかそれは」

きつちりとメモ帳を用意して横にいてくれた芙由子さんから、ペンとメモ帳を受け取った。

『ちいっとばかり急なんじゃが、来週末から三日間じゃ』

「はあ!？」

なんでも、押しつけようとしていた相手に急な仕事が舞い込んだそうで、とてもじゃないけど、のんびり勉強会には出られないとのこと。

祖父の名代として行けと命令を下されれば、私は従わざるを得ない。それにしても、来週末!？ ずっと疲れを感じ、早々に電話を切ろうとしたところで――、思いがけないことを訊かれた。

『そうじゃった、旭の様子はどうか？ あの男は優秀であろう』

「ムカつくくらい頭も回るし気が利くし、助かってるわよ？ いろいろと」

『そうかそうか。じゃがな、櫻子。興信所を使っても無駄じゃよ』

祖父の台詞に、思わず目を見開いた。

『こっそり調べようとしたみたいだが、わしの権限でやめさせたわ』

「は……、はあ!? ちよつとなに勝手な真似するの!? ってか依頼したのだからって昼すぎよ。なんで全部筒抜けなのよ!」

『己の力で見極めんか。お前は常に前しか見ようとせぬ。もっと広い視野を持ち、両隣も後ろも、ときには上下も見渡さないと、旭にはかなわぬよ』

「この、狐狸妖怪の親玉が……っ」

『ほおほおほお、光栄じゃ』

ほめてないわよ!

祖父ははつきり、私は早乙女にかなわないと断言した。あの男のほうが優秀な人間だと。

『なに、おぬしの意図は訊かぬよ。年寄りには娯楽が少ないが、まあよい報告を待ってるわい。楽しみにしておくぞよ』

言いたい放題言っつて、祖父は通話を切った。

いつも通り自分勝手すぎる。

「……少し、夕飯まで部屋で休むわ」

「かしこまりました」

精神的なダメージを一気に食らったから、せめて体力は回復させねば。

自室で興信所に連絡を入れれば、案の定祖父からの圧力で調査を中止したことを話してくれた。あの人が相手なら、どうしようもないことでもある。

一言、「私のお願いは忘れて」とだけ伝えて、部屋着に着替えてからベッドにダイブした。

ああもう、今日も疲れた……

束の間、私は夢も見ずに暫く意識を手放した。

男の好みを把握するにはどうしたらいいのか。

——答えは簡単。全部相手に投げればいい。

すべて早乙女の好きないようにさせれば、おのずと見えてくるはずだ、彼の女性の好みだ。

「今日の仕事は小早川に任せて、あなたは私のドレスを選んできてちょうだい」

「……ドレスとは、今週末に参加されるパーティーの、ですか」

「そうよ。家にあるのでいいかと思っただけ、やはりそういうわけにはいかないわ。誰かさんたちが、折角届いたプレゼントも送り返してしまおう。外商を呼ぶより、いつも傍にいるあなたを選んだほうが確実でしょ」

今日は水曜日で、パーティーは土曜日。明後日まで一式揃えられれば、問題ない。

ドレスにシヨール、靴とアクセサリー。ああ、それにバッグもか。

予算は特に決めていない。好きに使っていいと言いつ、領収書をうち宛てでもらうように告げた。

普段から寡黙で無表情の男が、渋面になる。

ふふ、悩んでいるわ。いきなりこんなことを言われて、戸惑っているのでしょうね。内心小悪魔のように、くすりと笑う。

「かしこまりました。では、社長の好みを教えていただけますか」

「いいえ、あなたが私に似合うと思うものを選んでこいと言ってるのよ。私の好みは、まあ派手すぎなければなんでもいいわ」

嫌でも目立つのはわかっているのに、さらに目立つ真似はしたくない。

「……念のため確認しますが、異性に衣服を贈られる意味を把握していますか？」

「え？ ステータスと見栄でしょ。美しく着飾った女を連れ歩きたいだけ。女もアクセサリーと同じよ。どうせ自分をよく見せるために大枚はたくんでしょう」

たびたび贈られてくる貢ぎ物に対して、私は下心しかないと考えている。

私の外見だけを好む男たちが、理想の淑女を自慢したいだけ。

ブランドもので全身を固めるのと同じだ。彼らの狙いは、いい女を連れてくるという優越感と、

あとは「鷹司家との親密さ」。それを周囲に見せたいだけなのだから。

「……なるほど。やはりそうお思いでしたか」

ぼそりと呟かれた言葉に、首をひねった。

なんとなく呆れがまじった眼差しで見つめられている気がするんだけど、喧嘩売ってるわけじゃないわよね？

「嫌なら小早川に頼むからいいわよ」

そう言えば、早乙女は「私が承ります」と即答した。

「なら、好きに選んでちょうだい。ただし私が着こなせるやつでね」

身長は日本人女性の平均よりやや高い百六十二センチほどだが、本音を言えばもう少しほしかつ

た。その分をヒールの高い靴で補っている。

ポーカーフェイスの中に苦さをまぜつつも、早乙女は頷き、部屋から出て行った。すぐにドレス選びに向かったのだろう。

「さて、あの男の好みはどんなのかしらね？」

露出が大胆なドレスだったりして。あらやだ、実はムツツリすけべ？

内心ほくそ笑みながら、パーティー当日を迎えた。

見知った顔がちらほら見つかる大手製薬会社の創業祭。当然、遊びで来ているわけではない。人脈作りと情報収集がメイン目的だ。

どこにビジネスチャンスが転がっているかわからない。

しかし、ゴロゴロ転がるそのチャンスを拾おうとしている私の傍には、常にぴたりとボディガードがくっついていた。もちろん、早乙女だ。

「あなた、もう少し和やかな顔は作れないの？」

眉間の皺に、仏頂面のポーカーフェイス。精悍な美丈夫とたびたび評される男だが、煌びやかな場でこの顔はいただけない。

「私のことより、社長はもう少し警戒心をお持ちになったほうがよろしいかと」

ちらり、と横目で私を捉えた男は、なんだかため息を吐きたそうにしている。失礼な。

「なによ、あなたが選んだドレスでしょ。完璧に着こなしている私にそんなもの言いたげな視線を

よこすなんて、いい度胸じゃない」

早乙女が選んだのは、シャンパンゴールド色が綺麗な足首までのドレス。素材は軽やかで、上品なデザインだ。胸元のレースが精緻で美しく、そして膝までスリットが入っているので歩きやすい。

七センチのヒールを履いて、髪は華やかにアップスタイル。ショールがずり落ちないように気をつけながら、私はスタッフからドン・ペリニヨンのフルートグラスを受け取った。

「ありがとう」

微笑んでお礼を告げれば、僅かに頬を染めるまだ年若い給仕係。その反応から、私は今、完璧なレディに化けていると言えるだろう。

「なんだ、私が贈ったのは送り返すのに、彼が選んだやつならいいのかい？」

柔らかなテノールの声が背後からかけられて、振り返る。

本日の主役のひとり、鷺沼製菓の専務だ。からかいを含んだ声ですぐにわかった。

「ご無沙汰しております、雅人様。本日はよき日を迎えられたこと、お祝い申し上げます。鷺沼様のおますますのご活躍をお祈りいたしますわ」

品よく口角を上げて相手を見つめれば、声をかけた男は柔らかく笑い返した。

「ありがとう、来てくれて嬉しいよ」

「創業祭が東京湾のクルージングだなんて、ロマンティックですわね」

「生憎、愛と一緒に語り合ってくれる人がいないだけだね。どうやら僕は振られてしまったよ

うだ」
冗談なのかわからない言葉に振り回されはしない。にっこり社会的な笑みで、このどこか軽いのにくせがある男を流した。

三十代後半の、恐らく早乙女より年上の彼は、祖父を介して何度か会ったことがある。

その頃から、人当たりのいい笑顔を見せてはいるが、相当なひねくれ者だと思っていた。その見解は正しいと確信している。

私に宛てたプレゼントも、裏があるに違いない。

すつと鷺沼専務が早乙女に目を向けた。くせ毛の髪が、海風になびく。ちなみにこは、会場内から外に続くデッキの上だ。

「お姫様のドレスは騎士の見立てなんだってね？ よく似合ってるよ、そのドレス。彼女が現れるだけで、ここに来ている男性陣の視線が釘づけだ」

騎士とは早乙女のことだろう。恥ずかしい呼び名をするのも嫌がらせかしら？

なんて思っている傍で、失礼にならない程度の最低限の言葉しか交わさない早乙女は、あくまでも付き添いの秘書として振る舞っている。

「害虫駆除が大変だね？」

びっくりと微かに早乙女の眉が反応した、ように見えた。はた目からじゃ気づかれないほど僅かだけ。

もの言いたげな視線を私によこす早乙女と、くすくす笑う鷺沼専務。

「君は相変わらず女王様の皮を被ったお姫様だ。さ、お手をどうぞ。そろそろ風が冷たくなってきたからね、中へ戻ろう。美しいお嬢様のエスコートを少しの間変わってもらおうよ」

「……承知しました」

何故か勝手にエスコート役が変わってしまった。主役と仲睦まじく歩くなんて、よからぬ噂が流れそうで面倒だけど、仕方がない。これも仕事だ。

「早乙女、すぐに戻るから近くにいなさいね」

頷き返したのを見て、私と専務は賑わうパーティー会場へと戻った。

「慎ましやかに微笑んだまま、隣を歩く背の高い男を見上げる。」

「いい趣味しますね、相変わらず」

「なんのことかな？」

「うちの秘書、あまりからかわないでくださいね。あなたが私を気に掛けるフリをするの、彼の反応が楽しいからでしょう」

「君は頭はいいのに肝心なところがわかってないよね。もう少し観察眼を養ったほうがいいよ」

「はい？」

なんか今バカにされなかった？

これ以上振り回されるのはごめんだ。

専務に群がる人が増えたと同時に、そつと輪の中から抜け出した。